ドイツで暮らす
……子どもの本に関わるあれこれ

那須田　淳

ちょうどいまケストナーの『飛ぶ教室』の新訳（木本栄との共訳）を脱稿し、ベルリンの自宅でゲラを読んでいるところである。九月に角川つばさ文庫から刊行されるもので、ぼくがドイツに創作活動の拠点を移してから二十年目の今年に、この本が出せるのはなにかの縁にはちがいない。

どうして、ドイツに？　と渡航当時もいまもよく聞かれるのだけれど、きっかけは九十年代の初めに、ミュンヘン国際児童図書館の当時の館長のボーテさんが、奨学研究員として呼んでくれたからだった。バイエルンの森にすむ魔物ボルパーティンガーをモデルにしたファンタジー『ボルピィ物語』を書いたとき、取材でおじゃましてからの縁で、誘ってくださったのである。

この国際図書館は、レップマン女史が、ケストナーたちの協力を得て、戦後まもなく、ドイツの子どもたちへ希望と勇気を取り戻してもらおうと、がれきのなかで巡回図書展を開催し、そのときの展示した本をもとに子どものための図書館として設立したものだ。この図書館では、世界で公募して、子どもの本にかかわる研究者や編集者、作家、画家たちを奨学研究員として、最長で三か月間採用する制度を現在も設けている。ぼくが研究員として呼ばれるまえには、ドイツ文学者の酒寄進一さん・遠山明子さんご夫妻がいらしていたし、そのあとも採用されている方がいらっしゃるので興味がある方は調べてみたらいかがだろうか。

なにしろこの図書館は、バイエルン王家のニンフェンブルク城につづく森と草原のはずれにあるブルーテンブルクという美しい古城である。ときどき展覧会なども行われているし、旅行でドイツを訪ねる方もぜひ立ち寄られるとよいだろう。図書館には、お濠の池に面したレストランもあって、鴨料理は絶品だし。

ところで、この図書館の奨学研究員は、滞在中は自分のテーマを研究することになっている。で、ぼくが選んだのは、「ケストナーの研究」と「作家との交流」だった。

ぼくは、もともとは、サロイヤン、サリンジャー、ブラットベリの影響を受け、ヤングアダルトを書きたくて、この道に入ったので、興味があったのは英米文学のほうだ。で、どうしてケストナーだったのかというと、じつは前述の『ボルピィ物語』が関係しているのである。この本は、バイエルンにあるシュリーア湖を舞台にしている。そこへ